

学位論文要旨

生涯学習の観点からみた高等学校保健体育科における  
「教材づくり」に関する研究

広島大学大学院教育学研究科

博士課程後期学習開発専攻

D093127 村上 恭子

## 目 次

### 序論

- 第1節 研究の背景と目的
- 第2節 先行研究の検討
- 第3節 研究の方法

### 本論

- 第I部 保健体育科における「教材づくり」論
  - 第1章 保健体育科における「教材づくり」の位置づけ
    - 第1節 保健体育という教科の捉え方
    - 第2節 保健体育科における「教材」の特性
    - 第3節 保健体育科における「教材づくり」とは何か
  - 第2章 保健体育科における「教材づくり」論
    - 高田典衛を中心にして—
      - 第1節 高田の体育授業観と略歴
      - 第2節 高田における「教材づくり」の視点
      - 第3節 「高田4原則」とは何か
      - 第4節 「高田4原則」を導き出した研究方法
- 第II部 高等学校保健体育科における「教材づくり」と実践研究
  - 第3章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究
    - エイズの授業実践に焦点づけて—
      - 第1節 保健分野におけるエイズ教材を取り上げる背景
      - 第2節 本実践研究の目的と方法
      - 第3節 結果と考察
      - 第4節 成果と今後の課題
  - 第4章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究
    - 創作ダンスの授業実践に焦点づけて—
      - 第1節 体育分野における創作ダンスを取り上げる背景
      - 第2節 本実践研究の目的と方法
      - 第3節 結果と考察
      - 第4節 成果と今後の課題

### 結論

- 第1節 本研究から得られた新たな知見
- 第2節 今後の課題

### 参考・引用文献一覧

### 参考資料一覧

### 参考 web ページ一覧

### 資 料

## 序論

### 1. 研究の背景と目的

我が国では、高齢化の進行に伴い健康寿命の延伸が求められ、青年期からの健康づくりの習慣化の必要性が指摘されている<sup>1</sup>。内閣府の調査や先行研究の検討から、生涯にわたって健康で豊かなスポーツライフを継続する実践力の育成を図ることの必要性が指摘された。にもかかわらず、高等学校保健体育科ではこの観点からの「教材づくり」に関する研究がほとんど行われていない。そこで、本研究では、この観点による「教材づくり」の検討をし、生涯にわたり健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成を図るための基礎的知見を得ることを目的とする。

### 2. 研究の方法

本論文は2部構成とした。第Ⅰ部では理論研究を行い、第Ⅱ部では実践研究を行った。第Ⅰ部の理論研究としては、保健体育という教科の特性から、「教材づくり」の観点を示すことにした(研究1, 第2章)。第Ⅱ部の実践研究として、研究2, 研究3を行った。研究2では、研究1によって明らかになった「教材づくり」の観点に基づいた保健教材による実践研究を行うことにした(第3章)。研究3では、研究1によって明らかになった「教材づくり」の観点に基づいた体育教材による実践研究を行うことにした(第4章)。

本論文の研究方法としては、アクション・リサーチの方法を用いた<sup>2</sup>。以下、本論文では「授業者＝研究者」と記す。

## 本論

### 第Ⅰ部 保健体育科における「教材づくり」論

#### 第1章 保健体育科における「教材づくり」の位置づけ

本論文は、健康寿命の延伸に伴い青年期からの健康づくりの習慣化が指摘されているなか、高等学校学習指導要領、保健体育科の、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」<sup>3</sup>という目標に着目する。

保健の「教材」は、学習者にとって、「後では取り返しがつかない」教材と「やがて必要になってくる」教材<sup>4</sup>とがあり、発達段階に即して現代社会が抱える健康課題を将来展望との関わりで取り扱うところに特性がある。体育の「教材」は、学習内容と「教材」とが一体であるところに特性がある<sup>5</sup>。つまり、「教材」とは、保健においては過去と未来を繋ぎ、体育においてはわかることとできることを繋ぐ媒介物であるといえる。

「教材づくり」において、保健では、『つくる教材』という発想には、内容(何を)と方法(いかに)を統合したレベルでの教材化を、創造的に構築していくものとしてとらえるプロ教師としての果たすべき役割、力量、責務が含意されている<sup>6</sup>と、数見が述べている。体育では、『素材』としてのスポーツ種目や技を、教え学ばれるべき『学習内容』を見通しながら、学習者が取り組み、チャレンジしていく直接的な課題に再構成(加工・修正)していくプロセス<sup>7</sup>と、岩田が述べている。岩田<sup>8</sup>は、「教材づくり」と教材研究を同義として取り扱っているが、高田<sup>9</sup>は、子どもの立場から「教材づくり」の必要性を述べている。本論文では、学習者の運動の喜び、楽しさ、面白さを「教材づくり」の核とする高田に依拠した。

## 第2章 保健体育科における「教材づくり」論

### －高田典衛を中心にして－

本章の目的は、生涯にわたって、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力をもった学習者を育成するという立場から、「教材づくり」の視点を導出することである。「高田4原則」から理論化を行う過程で、「教材づくり」の視点として次の3点を導出した。第1に、個を大切にすること、第2に、子どもにとってよい授業を行うために省察を行うこと、第3に、同僚の学び合いを行うことの3点である。

## 第Ⅱ部 高等学校保健体育科における「教材づくり」と実践研究

### 第3章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究

#### －エイズの授業実践に焦点づけて－

#### 本実践研究の目的

本実践研究の目的は、「教材づくり」の3つの視点を含んで開発したエイズ教材を用いて、高校生の健康認識を高めることである。それを通して、「教材づくり」を成立させるために必要なことについて検討をする。

#### 本実践研究の方法

**研究期間：**2011年1月11日（予備調査）、2011年2月8日～2011年2月23日（保健授業、計4時間）。

**研究対象：**授業者＝研究者と授業者＝研究者が担当するA高校1年生女子28名。

#### 研究手続き：

エイズに関して高校で学習したいことの予備調査を5分程度で行った。予備調査の記述内容を次の3点を基準として個々に分類した。第1に、一文で切った。第2に、1つの単語で回答しているものも一文として捉えた。第3に、指示語を含む単語については、授業者＝研究者が文脈から判断をした。分類の手順は次の3点からカテゴリー化した。第1に、分類した記述内容に通し番号をつけた。第2に、これらをカードにし、2名の大学院生が独立してKJ法で分類した。第3に、2名の大学院生は分類したカテゴリーをもとに相談して、一致したものをカテゴリーとして採用し、7つの観点が導出された。エイズに関する知識理解の変容を見るために、和唐<sup>10</sup>を参考にして、事前調査（2011年2月8日）と事後調査（2011年2月23日）を同一の設問項目で5分程度実施した。4時間分の感想を、7つの観点で分類した。

#### 成果と今後の課題

本実践研究から、次の3点の示唆を得た。第1に、「病者」という他者を自己の立場に置き換えて考えることにより、社会という横軸の広がりの中から健康観を考える「教材づくり」の視点が明らかになった。第2に、「病者」という視点から健康問題を考えることにより、今まで気づけなかった社会との関わりにおいて自己の健康が支えられているという認識の広がりを促進するという示唆を得た。第3に、エイズを自己の間

題として引き取った場合、自己の命は過去から未来へと繋がり合ってきたという縦の時間軸で考える必要性が示唆された。以上から、自己の視点を「病者」という他者や、繋がり合う生命として、過去から未来へと視点を変えさせること、さらに、社会という横軸の広がりや時間という縦軸との繋がりを意識させることにより、「自己の問題」へと引き取らせる「教材づくり」の必要性が示唆された。

「教材づくり」を成立させるために、次の3点の示唆を得た。

(1) 授業者＝研究者には、第1に、健康リテラシー（健康についての識字能力）の形成を保障することである。第2に、「教材」を通して他者と自己との視点の往還を行わせることである。第3に、継続的な「教材づくり」へのフィールドワークを行うことである。

(2) 学習者には、第1に、授業者＝研究者と学習者との双方向からの学びの主体者となることである。第2に、他者との関わりにより、異なる意見を通して自己の認識の拡大を図ることである。

(3) 授業参観者（授業者＝研究者の同僚）には、第1に、学習者を理解するための多様な視点の提供をすることである。第2に、新たな教材選択の視点の提供を行うことである。第3に、授業者が開発した教材・教具への評価を行うことである。

#### **第4章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究 —創作ダンスの授業実践に焦点づけて—**

##### **本実践研究の目的**

本実践研究の目的は、「教材づくり」の3つの視点を含んで開発した創作ダンス教材を用いて、高校生の身体認識を広げることである。それを通して、「教材づくり」を成立させるために必要なことについて検討をする。

##### **本実践研究の方法**

**研究期間：**2010年11月9日～2011年1月11日（計12時間）。

**研究対象：**授業者＝研究者が担当するA高校2年生A組でダンスを履修した女子生徒。

##### **研究手続き：**

創作ダンスの事前調査として、中学校の既習内容を5分程度記述させた。学習者の予備調査の記述内容を分類した。以下の3点を基準として個々に分類した。第1に、一文で切った。第2に、1つの単語で回答しているものについても一文として捉えた。第3に、指示語を含む単語については、授業者＝研究者が文脈から判断をした。分類の手順は次の3点を基準としてカテゴリー化した。第1に、分類した記述内容に通し番号をつけた。第2に、これらをカードにし2名の大学院生が独立してKJ法で分類した。第3に、2名の大学院生は、分類したカテゴリーをもとに相談して、一致したものを9つのカテゴリーとして採用した。9つのカテゴリーにおいて、否定的な記述をしていたのはA子ひとりであった。A子を今回の調査対象者とした。毎授業、振り返り用紙を用いて省察をさせた。授業中に一点固定式によるビデオの録画をした。撮影し

た授業記録を、学習者は動きの省察に活用した。作品の鑑賞と単元全体の振り返りを20分程度行った。

## 成果と今後の課題

本実践研究から、「教材づくり」を成立させるために次の点が示唆された。

(1) 授業者＝研究者に必要とされること

- ① 学習者と教材の特性について共通認識を図ること
- ② マイナスイメージを持っている個を大切にす指導を行うこと
- ③ 心を開かせる「教材」を用いること
- ④ 鑑賞者という「他者の視点」を持たせること
- ⑤ 学習者の思いにまなざしを向けること

(2) 学習者に必要とされること

- ① 創作ダンスに対するイメージを素直に表出すること
- ② 教材や課題への疑問を教師に伝えること

(3) 授業者＝研究者と学習者の双方に必要とされること

授業者＝研究者と学習者がイメージを共有して、鑑賞者という第三者にわかるように作品づくりを行うことが必要だということが示唆された。鑑賞者という第三者の視点を持つことが、授業者＝研究者と学習者の双方に必要とされることが示唆された。

付記：事例の公表に当たっては、本人と保護者の了解を得ている。感想文の記載においては生徒が特定されないように、内容が変わらない程度の修正を加えている。

## 結 論

### 1. 本研究から得られた新たな知見

本研究の目的は、生涯学習との関連から高等学校卒業後も「健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力」を持った学習者を育成するために、「教材づくり」の基礎的知見を得ることであった。研究1では、「教材づくり」の視点とは何かを高田典衛の「高田4原則」をもとに検討した。その結果、「教材づくり」の3つの視点として「個を大切にす」、「省察をす」、「同僚による学び合いをす」を導出した。研究2では、保健におけるエイズ教材を用いて、上記の3つの視点を含んだ「教材づくり」の実践研究を行った。その結果、次の3点が示唆された。第1に、「病者」という他者を自己の立場に置き換えて考えることにより、社会という横軸の広がりの中から健康観を考える「教材づくり」の必要性が明らかになった。第2に、「病者」という視点から健康問題を考えることにより、今まで気づかなかつた社会との関わりにおいて自己の健康が支えられているという認識の広がりをもつという示唆を得た。第3に、自己の命は過去から未来へと繋がり合うものだという縦の時間軸で考えさせる「教材づくり」の必要性が示唆された。以上から、自己の視点を、「病者」という他者や、繋がり合う生命という過去から未来へと視点移動をさせることにより、自己の問題として考えさせる「教材づくり」の必要性が示唆された。研究3では、体育における創作ダンス教材を用いて、上記の3つの視点を含んだ「教

材づくり」の実践研究を行った。その結果、次の3点が示唆された。第1に、過去の楽しい共通体験から「心を開く」教材を用意することで、主体性が高まることが示唆された。第2に、学習者に「他者の視点」を持たせることにより、自分、他者、自分の中のもう一人の自分など、複数の視点を持たせることができることが示唆された。第3に、授業者＝研究者は、目の前にいる学習者の理解、特にマイナスイメージや否定的な思いを根底にして、「教材」を作り上げる必要性があることが示唆された。

以上から、本研究により新たに得られた知見は、次の通りである。第1に、「高田4原則」から導き出された「個を大切にする」、「省察」、「同僚の学び合い」の3点に加えて、高等学校保健体育科においては「他者の視点を持たせる」という2つの視点が必要であるということである。第2に、「教材づくり」において重要なことは、教師自身が「教材づくり」を行う際に空間軸と時間軸において複数の視点を持つこと、それにより、学習者に空間軸と時間軸において複数の視点をもたせる必要性があることである。

## 2. 今後の課題

今後の課題として次の3点があげられる。第1に、今回の「教材づくり」の研究は、高等学校の女子に限定したが、女子だけに効果的なのか、男子にも効果的なのかは、検証できなかった。今後は、男女に調査対象を広げ、男女ともに効果的な「教材づくり」を行いたい。第2に、「教材」の選択幅を広げることである。保健の「教材」はエイズばかりではない。体育の「教材」も創作ダンスばかりではない。例えば、保健では、生活習慣病、ストレス対応、労働と健康などがあげられる。体育では、体づくり運動、陸上競技、球技などがあげられる。これらを、生涯にわたって継続するという視点で保健体育科の「教材」として検討することが考えられる。第3に、今後、アクション・リサーチを行う多くの授業者＝研究者とその成果を共有して、小・中・高等学校の発達段階に即した、生涯、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力につながる学習者の「教材づくり」を行っていくことである。

---

1 厚生労働省「国民の健康寿命が延伸する社会」に向けた予防・健康管理に関する取組の推進。<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000019326.html> (2013年10月21日取得)。

2 安彦忠彦他編『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい、2002年、20頁。

3 文部科学省、高等学校学習指導要領、平成21年3月。

4 数見隆生「保健の教材づくりとそのあり方」森昭三・和唐正勝編著『新版 保健の授業づくり入門』大修館書店、2002年、144頁。

5 江刺幸政『体育教育における教材構成の理論的基礎』創文企画、1999年、154頁。

6 数見隆生、前掲書、146頁。

7 岩田靖『体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店、2012年、20頁。

8 岩田靖、同上書、21頁。

9 高田典衛『子どものための体育科－体育科の授業と教材－』大修館書店、1967年、頁数記載なし。

10 和唐正勝「エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発」(平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号15500471 研究成果報告書『エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発』研究代表者：和唐正勝)2005年、73頁。